
遊戯王 狂わされし運命

Rデッド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王 狂わされし運命

【Nコード】

N4677Y

【作者名】

Rデッド

【あらすじ】

目を覚ますと俺は真っ白な空間にいた。
死神の話によると、俺は死んだらしい。
ただ俺の死はいいつらの予定に無かったらしく、
俺は別の世界に転生することになった・・・
この小説は突如死んでしまった主人公が、
遊戯王の世界に転生する物語です。
デュエルは低レベルでしょうがどうかよろしくおねがいします。

TURNOO プロローグ（前書き）

ども、2作目の小説となりました。Rデッドです。
ネギまと平行してやっていくつもりなのでよろしくおねがいします。

TURN 00 プロローグ

「ここは・・・どこだ?・・・」

目覚めた俺は何故か、何も無い真っ白な空間にいた。

「確か俺は・・・」

俺は確か・・・駄目だ、思い出せない。いったい俺はどうしてここに
いるんだ?・・・

それはあなたが死んだからです

俺の疑問に答えるように黒いローブを着た眼鏡の女が現れた。

「死んだ?俺がか?・・・いや、その前に教える。お前は誰だ?そ
してここはどこなんだ?」

ここは天国と地獄の境目。そして私は死神です。

「天国と地獄の境目?死神だと?どこぞの漫画のゲストキャラみた
いな格好しやがって・・・」

ふざけてんのかこの女・・・いや、コイツの顔を見る限り本当らし
いな、目を見ればわかる。

何より俺がこんな空間にいる時点で、こいつの言うことは本物なの
だろう。

「まあいい。で、なんで俺はこんなところにいるんだ?死んだなら

天国か地獄のどちらかに逝くはずだろう？
最も俺は地獄行きだろうがな。」

そつだ、俺は生きてる時はお世辞にも善人だったかと問われると、
そうではない。寧ろ悪人寄りだと思う。

いえ、そうでもないんです。確かにあなたは善人かと問われれば悪人だと答える人もいるでしょう。

しかし、同じようにあなたは悪人かと問われれば善人だと答える人もいます。

「続けてくれ。」

つまりあなたは善人でもあれば悪人でもあり、悪人でもあれば善人でもあります。

なので一概にあなたを地獄に送ることは出来ないんです。同じように天国に送ることもね。

「なるほど、よく分かった。となると、俺はどうなるんだ？」

それに、あなたの死は予定になかったんです。

「何だと？」

あなたの寿命はあと数十年は残っていた、それにも関わらずあなたは死んでしまったんです。

こういうことは無かったわけでもないのですが前例は限りなく少ないんです。

「で？」

しかしその少ない前例の中でも、あなたのように善人でもあり悪人でもある人は今までいなかった。

善人が悪人かのどちらかだったんです。どちらとも言えない者を天国または地獄に送ることは出来ません。

評議の結果、あなたへの処遇はこうなりました。

評議ねえ、死神つてのは職業みたいなモンなのか？サラリーマンみたいに会議してんのが目に浮かぶぜ。

「で、俺はどうなるんだ？」

あなたには転生をしてもらうことになりました。

は？転生？

「意味、生まれ変わること。」

「ちょっと待て。生き返ることになりました、ってなら分かるが何故転生なんだ？」

あなたの疑問は最もです。しかし、どちらにも当てはまるあなたをこうするのが一番だとの上からの命令なんです。その世界で善人であれば死んだ後は天国に、逆に悪人であれば地獄に落とされることが確定されます。

通販のお試し期間みたいだな・・・

まあいい、もともと失くした命だ。たとえ別の世界で生き返ろうと同じ事、これもまた運命だ。

「わかった、それに従おう。で？俺はどこ这个世界に転生するんだ？」

ふふ、それは転生してからののお楽しみです。その方が楽しみがあつていいでしょう。

ではお元気で。数十年後、もしくは百数年後にまたお会いしましょう。

・・・確かに教えない方が楽しみがあつていいのかも知れんが、今回はそっちの落ち度なんだから教えるのがいいんじゃないか？

そう思いながら俺は光に包まれ意識を失った・・・

TURN00 プロローグ（後書き）

何とかプロローグを投稿しました。久しぶりに新しく投稿するとやり方を忘れているなあ・・・

まあ以前は2、3週間に1回のペースの投稿だったので少しはスピードが上がると思います。

まあよろしくおねがいします。

TURN01 始まった第2の人生（前書き）

今回からデュエルです。

三沢大地が好きな人はどうか注意してください。

TURN 01 始まった第2の人生

天国と地獄の境目で行われた会話から16年、俺は16歳になっていた。

16年。一年で言うとも16だが一月では192ヶ月、一日に直すと約5980日。

長いと言えば長く、短いと言えば短い時間だ。

いや、実際長かったんだが。

転生を受け入れた俺がまずしたことは「後悔」だった。

どこぞの魔法世界に召喚されたわけでは無いので今まで生きてきた人生をもう一度最初からやり直さなければならなかったからだ。

何故気付かなかったのだろう、俺も気付かないうちにテンパっていたのかも知れない。

まあ新たに得るものは十二分にあつたので結局は良かったのだが。とにかくあれから16年、俺は今、高校に向かうため船旅をしている。

おっと、忘れるところだった。俺のこの世界での名前はキルマ、獅子雄キルマだ。

だが何故か前世（といってもたった16年前だが）と名前は変わっていない。これには驚いたものだ。

だが、もっと驚いたことがある。それは・・・

「畏カード、破壊輪発動！」

「何!？」

「このカードはフィールド上で表側表示で存在するモンスターを一体破壊し、お互いにその攻撃力分のダメージを受ける！」

建物の中では決闘^{デュエル}が行われていた。しかしあの机の上でカードを広げて行う奴ではない。

ソリッド・ビジョン、つまりはホログラムにより実際にカードの効果が出てくる奴だ。

もう分かるだろう、俺は遊戯王の世界に転生していたのだ。

この世界で初めてデュエルを見た時そりゃぶったまげたもんだ。なんせ迫力が違うからな。

ちなみに時代的には海老頭の出てくる世界でも無ければヒトデ頭の出てくる世界でもない、融合モンスターが大活躍のGXな世界である。

個人的にはバイクに乗った無口なメ蟹ツクの世界が良かったんだがまあいい。

ここで行われているのはデュエル・アカデミア入学のための実技試験デュエルだ。

今しがたデュエルに勝利した奴は三沢大地。勝利の方法がアニメと一緒にだ。この流れだと合格だろう。

「すっげー強いなお前！」

「ああ。」

「今年の受験生で2番目くらいに強いかもな」

今三沢に話しかけたやつはこの世界の主人公の遊城十代、右隣にいる奴が後の弟分の丸藤翔だ。

「ん!?!」

「試験番号110番、遊城十代くん。」

「お。よし、俺の番だ！」

「君。」

「ん？」

「何故、僕が2番なんだい？」

「ん？一番は俺だからさ！」

「！」

「僕より筆記試験の順位が10番いいだけで、何であんなにあんな自信が持てるんだらう？うらやましい・・・」

まあそう言っな、お気楽で能天気、それが十代なんだから。気にするだけ無駄だろう。

最も俺は進んで関わり合うつもりは無いがな。

十代とクロノスとの決闘もアニメ通り。まあ負けてもらっっちゃあ困るからこれでいいんだがな。

「どんなもんだ！」

「すごいよ、あのクロノス先生に勝つなんて！」

「おめでとう1番くん。」

すごいはいしゃぎようだな。まあ分からんでもないが。しかし・・・

「もう少し静かにできないのかあいつらは？他の受験生の迷惑だろう・・・」

「あ、悪い。ごめんな、うるさくして・・・」

「！-！」

俺がぼやいてると、いきなり十代が謝ってきた。・・・てかこいつとの距離って結構あったよな？・・・

「いや、俺は大丈夫だ。ま、おめでとう。」

「おう、ありがとうな！俺は遊城十代だ、よろしく！」

「三沢大地だ、よろしく。」

「僕は丸藤翔つす。よろしく。」

「獅子雄キルマだ、よろしく。」

顔合わせをする気はなかったんだが、仕方ない。これも運命だ。

「試験番号2番、獅子雄キルマくん。」

「どうやら俺の番だな。」

「「試験番号2番！？」」「」

そうとう驚いているな。まあ無理もない。俺の世界では単なる遊びでしかなかったからカードテキストが覚えやすかったからな。失敗したのはOCGと効果が違うカードだけだ。
もし元の生まれがこの世界だったらこうはいかなかっただろうが。

「ま、そういうことだ。また後でな。」

「すっげー、あいつ強いのかな？」

「多分強いと思うよ？・・・どうしたの三沢くん？」

「いや、なんでもない・・・」

「それでは始めよう、試験番号2番獅子雄キルマくん。」

俺の相手は名もなき試験官・・・じゃなかった試験官だ。しかしモブキャラでも試験官は試験官、気を引き締めないとな。

「お手柔らかに。」

「決闘！！」

キルマ LP4000

試験官 LP4000

「先行は君からだ。さあドローしまえ。」

「では遠慮なく。俺のターン！ドロー！俺は手札から『闇竜の黒騎士』を召喚、カードを一枚伏せてターンエンド！」

闇竜の黒騎士 ATK1900/DEF1200

このデッキは俺が複数持つデッキの中のお気に入りの一つだ。相当手札が悪くない限り負けることは無い。

「いきなり攻撃力1900のモンスターだと！？私のターン！ドロ！私は手札から『切り込み隊長』を召喚！」

切り込み隊長 ATK1200/DEF400

「そしてモンスター効果発動！このカードの召喚に成功した時、手札からレベル4以下の戦士族モンスターを一体特殊召喚できる！私は『ならず者傭兵部隊』を特殊召喚！」

ならず者傭兵部隊 ATK1000/DEF1000

「そしてならず者傭兵部隊の効果発動！このモンスターを生贄にすることでフィールド上に存在するモンスターを選択して破壊することが『リバースカードオープン！速効魔法『禁じられた聖杯』！このカードはフィールド上に表側表示で存在するモンスターを一体選択し、エンドフェイズ時まで選択したモンスターの攻撃力を400

ポイントアップし、効果を無効化する！」なんだと!？」

禁じられた聖杯の効果により、ならず者傭兵部隊の効果が無効化される。

「くっ、これではならず者傭兵部隊の効果が使えない!?!?・・・私はカードを一枚伏せターンエンド!」

「俺のターン、ドロー!俺は手札から魔法カード『強欲な壺』を発動!カードを2枚ドロー!そして手札から魔法カード『無の煉獄』を2枚発動!このカードは俺の手札が3枚以上ある場合に発動できる!この効果で俺はカードを1枚ずつドローする!そしてこのターンのエンドフェイズに俺は手札を全て捨てなければならぬ!」

引いたカードは・・・これならいける!

「さらに手札から魔法カード『天使の施し』を発動!俺はカードを3枚ドローし、手札からカードを2枚墓地に送る!!」

「また手札増強カードだと!・・・」

俺のデッキには手札を捨てる手札増強カードは結構入っているからな。アンデットとは相性がいい。

しかし、今日のデッキはよく回るな。何故だ?

まあいい。俺が落としたのは『ゾンビ・キヤリア』と『馬頭鬼』だ。ここからシンクロ召喚に繋げることが出来る。

ちなみに俺がシンクロ召喚を使えるのは、前の世界で作ったデッキを持っているからだ。

何故持っているかと言うと、あれから偶に俺のもとを訪れる死神がデッキを持ってきたからだ。

この世界で使うのはまずいんじゃないかと思いついてみたが、奴が言うには自分たちのせいで俺が転生する羽目になった『お詫び』ら

しい。

まあそれでもゾンビ・キャリアも入れてこのデッキを使うのは、この世界では初めてだ。

普段から使うのは拙いし、なによりシンクロ召喚したら色々と噂になりデッキを狙われる可能性も出てくるからな。

「更に俺は手札から魔法カード『デュアルサモン二重召喚』を発動！この効果により、俺はこのターン通常召喚を2回行うことができる！俺は『ゾンビ・マスター』を召喚！」

ゾンビ・マスター ATK1800/DEF0

「そしてゾンビ・マスターの効果発動！このカードがフィールド上に存在する限り、1ターンに一度手札のモンスターカードを一枚墓地に送ることと自分、または相手の墓地に存在するアンデット族モンスター一体を特殊召喚する！俺は手札のマーダーサーカス・ゾンビを墓地に送り、墓地のマーダーサーカス・ゾンビを特殊召喚する！蘇れ、マーダーサーカス・ゾンビ！」

マーダーサーカス・ゾンビ ATK1350/DEF0

「そして俺は二重召喚の効果で手札からもう一体のマーダーサーカス・ゾンビを召喚！そして俺は手札のカード1枚をデッキトップに戻し、墓地からチューナーモンスター『ゾンビ・キャリア』を特殊召喚する！この効果で特殊召喚したゾンビ・キャリアはフィールドを離れた時、除外される！」

ゾンビ・キャリア ATK400/DEF200

「チューナーモンスターだと！？何だそれは！？」

あいつ、あんな攻撃力の低いモンスターを出してどうするつもりだ？

弱い奴なんじゃないか？

こいつを馬鹿にする声が観客から聞こえるが気にすることは無い。
こいつらの強さは俺がよく知っている。それに次の瞬間その口が驚きに開かれるからな。

「こいつを馬鹿にすると痛い目を見るぜ？レベル2のマードーサーカス・ゾンビ二体に、レベル2のゾンビ・キャリアをチューニング！」

「チューニング！？何だそれは！？」

2 + 2 + 2 = 6

「冥府を統べし不死の魔王よ。死者の恐怖を生者に示し、現世を恐怖で戒めろ！シンクロ召喚！」

いでよ『アンデット・スカル・デーモン』！」

『オオオオオ！・・・』

アンデット・スカル・デーモン ATK 2500 / DEF 1200

アンデット・スカル・デーモンが召喚される。16年ぶりに見ると爽快だな、改めてシンクロ召喚のすごさが分かるというものだ。だがいつまでも感心しているわけにもいかないな。

「これは『デーモン召喚』！？何故こんなレアカードを！？」

「これはデーモンの召喚では無くアンデット・スカル・デーモンです。お間違えなく。」

まあ間違えるのも無理はないのかも知れない。見た目はデーモンの召喚を恐ろしくしたような姿だからな。

「さらに俺は墓地の馬頭鬼の効果発動！墓地のこのカードを除外することで、墓地からアンデット族モンスターを一体特殊召喚する！蘇れ、マードーサーカス・ゾンビ！」

俺の場に再度マードーサーカス・ゾンビが召喚された。これで俺のモンスターは3体、これで決める！

「俺はマードーサーカス・ゾンビで切り込み隊長に攻撃！」

「残念だがリバーズカードオープン！『聖なるバリア ミラーフォース』！このカードは相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事が出来る！」

その効果で相手フィールド上の攻撃表示モンスターを全て破壊「アンデット・スカル・デーモンの効果発動！このカードが表側表示で自分フィールド上に存在する限り、俺のフィールドのアンデット族モンスターはカードの効果では破壊されない！『不滅の波導』！」
何だと！？

アンデット・スカル・デーモンから発せられた不滅の波導を受け、ミラーフォースが音を立てて破壊されていく。やはりあのカードはミラーフォースだったか。

そしてマードーサーカス・ゾンビの鎌が切り込み隊長を脳天から真っ二つにする。ソリッド・ビジョンだとすごい光景だな。

「ぐああつ！」

試験官 LP4000 3850

「さらにゾンビ・マスターでダイレクトアタック！」

「ぐあああああつ！」

試験官 LP3850 2050

「これで終わりだ！ アンデット・スカル・デーモンでダイレクトアタック！ 『死降雷』！」

「うわあああああああああつ！」

試験官 LP20500

ワアアアアアアアアアアア!!

!!

死降雷が決まり、会場に観客の声が轟いた。やはり手を抜かず本気でデュエルするのはいいな、心地がいい。今まではバレると面倒だからシンクロ召喚をしたことが無かったからな。

まあそれでも負けたことはないが。そう考えていると試験官が起き上がった。

「試験用のデッキとはいえ、LPを削られること無く勝利するとはな。私の完敗だ。おめでとう、試験番号2番。文句なく合格だ。」

試験用と言っても結構なデツキだったと思うがな。というか合格を通知されるのは別にかまわないんだが、ここで言うのはまずいんじゃないか？

大体あんたの一存じゃ決められんだろう？まあいい、とにかくお墨付きを貰ったんだ。文句があるわけでもないしな。

「これからデュエル・アカデミアで頑張ってくれたまえ。」

「ありがとうございます。」

俺がフィールドを立ち去ろうとした時、

「そうだ、思い出した！」

いきなり三沢の大声が聞こえた。一体何なんだ？

観客 side

「そうだ、思い出した！」

何故こんなことを思い出せなかったのだろう。俺は唇を噛む。

「なんだよ三沢？」

「何を思い出したの？」

「彼、獅子雄キルマのことだ！彼は6年前にアメリカで開かれたデュエルの世界大会で優勝したことがあるんだ！」

「「ええ！？」」

彼はその時とは違うデッキを使っていたから気付かなかった！あの時は俺もテレビの前で手に汗握って応援したものだ。

キルマ side

あの馬鹿、よけいなことを！

俺は三沢の発言を聞き苦々しく思った。これを知られると面倒なんだよ。優勝したのが最年少だったせいで、あれから暫くテレビ出演の依頼で文字通り寝る暇もなかったからな。

しかも俺の首を狙ってデュエルを挑む奴や、デッキを狙う奴が増えたからな。デュエルをしに来た奴らはデュエルで返り討ちに、デッキを狙いに来た奴は肉体的にも精神的にも叩き潰して病院送りにしてやったがな。

病院送りにした連中は全員身体は全治1ヶ月、心はさらに3ヶ月ほどの治療が必要だったが自業自得だな、俺の知ったことじゃない。

「おめでとう、キルマ！すごいな、ノーダメージで勝っちまうなんて！」

「ほんと、すごかったす！」

「さすがアメリカの世界大会での優勝者「黙れ。」！？・・・」

三沢が再度その話を持ち出したので俺はこいつの胸ぐらを掴んだ。何が起こったのか分からず啞然とする十代達。胸ぐらを掴まれた三沢も困惑の色を隠せない。

「もう一度その話をしてみる、潰すぞ？」

「お、おい！いきなりどうしたんだよ！？」

「そうつす！喧嘩はダメっすよ！？」

後ろで十代達が騒いでいるがそんなのはどうでもいい。こいつの口

を塞がなきゃならんからな。

「俺はその話を聞くと虫唾が走るんだよ、優勝してからカードやデツキを狙う奴が出てきたからな。

最もそのたびに返り討ちにして病院に叩き込んでやったがな。

今度そのことを言ってみろ、お前も叩き潰して病院送りにしてやるよ。」

ちっ、騒ぎを聞きつけて教師が来やがった。俺は三沢を離すと試験会場を後にするのだった。

三沢 side

「大丈夫か君！？怪我は無いか！？」

「ゲホッ、だ、大丈夫です。」

先生たちがキルマを止めるためにやってきた。どうやら誰かが呼んだらしい。

「マンマミーア！まったくなんて生徒ナノーネ！これは彼の合格を見合わせる必要ーが「待つてください！」「何故ナノーネ？」

俺は彼の合格処分を取り消す考えを下そうとしたクロノス教諭を止める。

「彼は、キルマは悪くないんです！俺が知らなかったとはいえ彼が気にしていることを思い出させてしまったから！……」

「どうということナノーネ？」

俺は、彼がアメリカでの優勝後に起こったことを話した。

「そうだったノーネ・・・」

「悪いのは俺なんです、どうか彼の合格を取り消さないでください！」

「俺からも頼むぜ先生！」

「僕からもお願いっす、先生！」

俺は必死に頭を下げた。このままでは彼に合わす顔が無い、何より俺はまだ彼に謝罪できていないからだ。

「・・・分かったノーネ。そこまで言うなーラ仕方がないノーネ。」

「それじゃあ・・・」

「彼の合格を取り消すのは辞めるノーネ！」

「「あ、ありがとうございます！！！！」」

「シニョール・キルマもいい友達を持ったノーネ。」

俺たちの訴えが先生に届いた！これで彼の不合格は撤回された！

「やったぜ！」

「ほんと、よかったっす！」

「本当にありがとうございます！」

良かった、本当に良かった！俺は彼に謝らないとな、しかし彼が許してくれるかどうか・・・それなら許してくれるまで謝るまでだ。俺はそう誓った。

キルマ side

「ちっ、おかげで思い出しちゃった・・・」

俺は自宅の自分の部屋でイラついてた。別に昔のことは今は何とも思っていないが、何故あんなに反応したのだろう？

「俺も年齢通り、まだまだガキってことか・・・」

まあいい、これで俺に近づいてくる奴が減ることを考えると良しとするか。俺は前の世界でもそうだが、基本的に人と深く関わり事は無い。

前の世界では世間一般で親友と呼べる奴も、あえて2、3人程度しか作らなかつたしな。俺の周りには昔から俺についていれば守ってくれる、俺と仲良くなっていればいざという時に助けてもらえるという俺を利用することしか考えない奴ばかりだったからだ。そういう奴とは絶対に関わろうとしなかつたし、また近づけようとしなかつた。

俺が本当に信用するのは最初からそういう打算を持っていない奴だけだ。最も俺を利用しようとした奴は逆に利用してやったこともあったがな。

まあまあ、そんな物騒なことを考えないでください。

「何しに気やつた？」

いいじゃないですか、遊びに来るくらい。

何が遊びに来るくらいだ。ただサボりに来てるだけだろうが。この死神は度々俺の元を訪れる職務怠慢な奴だ、さっさとリストラされちまえ。

見ていましたよ、今日のデュエル。すごかったですねーってなにするんですかぁー！？

「お前がいらんことを言うからだ。」

こいつの口を止めるには塩を撒くに限る。まあ死神に聞くともしれんが、何故か有効だ。

うう、口の中がじりじりします・・・

自業自得だな。

そんなことより2週間後から見事高校生ですね、おめでとございます。

「ありがとうよ。」

いらんことを言ったと思えばちゃんとの確なことを言ってくる。抜け目のないといか、気が利くと言つか・・・

いえいえいいんですよ・・・！？まずい、専務にバレた！？じや、じゃあこれで失礼しまーす！？

そう言っであいつは慌てて帰って行った。本当に騒がしい奴だ。

「まあいい。もう寝るとするか。」

いつのまにか夜は更け、すっかり暗くなっていた。俺はまだ見ぬデュエルアカデミアの地を夢見て眠りに就いた。

TURN 01 始まった第2の人生（後書き）

キ「さて、今回の最強カードは・・・アンデット・スカル・デーモンか。」

アンデット・スカル・デーモン

「ゾンビ・キャリア」+チューナー以外のアンデット族モンスター2体以上

自分フィールド上に表側表示で存在するアンデッド族モンスターはカードの効果では破壊されない。

キ「アンデット族デッキの切り札その1だ。俺のデッキの主軸の一枚だな。効果名は『不滅の波導』、攻撃名は『死降雷』だ。ちなみにどちらもRオリジナルだ。」

実際に使っているモンスターの一体です。といってもTFなのですが・・・現実ではデッキすら作って無いからなあ。

チューナー以外のアンデット族モンスター2体というのを忘れていて他のアンデット族シンクロモンスターを出さなければならないことが多い不憫なモンスターです。

基本チューナー以外のモンスターはマーダーサーカス・ゾンビだし。この時はまだ発売されていないカードも多く入っています。そこんところは良く分からないので大目に見てください、いやホントに（泣）

あと基本的にデュエルタクティクスは低いです、小説の中のデュエルも低レベルでしょうがそのところは勘弁してください。

そして強欲な壺と天使の施しですが、この時まで禁止されていないかったので使っているだけなのでご了承ください。

作者はこの時代の禁止・制限・準制限がなんなのか良く知らないの
でそれも勘弁してください（泣）

感想お待ちしています。

TURN02 傲慢という名の暴力（前書き）

今回は当初は嫌味なあの人が登場です。傲慢って一種の暴力みたいなものだよなあ・・・

そしていきなりタッグフオースキャラ登場です。さて、誰が出てくるのやら。

そしていきなりオリ設定入っています。お楽しみに。

TURN 02 傲慢という名の暴力

あれから3日後、デュエルアカデミアから合格通知が届いた。結果は合格、しかも何故かオベリスクブルーだ。

・・・オベリスクブルーって中等部のエリートしか入れなかったよな、何で編入組の俺が入れるんだ？・・・

俺の中学は一応デュエル関係ではあったが、デュエルアカデミアとはまた違う学校だったので編入という形でここを受験した。

どうやら俺がここへ来たせいなのかどうかは分からんが、少々アニメ、原作とは違う方向へ進んで行ってるらしいな。

合格が決まってから俺の親(この世界のだが)は自分の事みたいにはしゃいでいた。見ているこっちが恥ずかしくなるくらいにな。

あの日から数日後、俺はデュエルアカデミアへ行くための船に上にしたわけだが・・・

周りが俺の事を話しているのが聞こえる。悪いうわさのほうが多いみたいだな。十中八九、三沢が俺の事を大声で話したために、俺があいつに掴みかかったせいだろう。

しかも何かあること無いこと噂されてるしな。だが人の噂も75日、2か月半もいれば消えるだろう。

ま、噂のおかげで誰も近づいてこようとしないのは僥倖だな。

島に付いた俺達新入生は早速それぞれの寮に行き、それぞれの寮の制服に着替えた後、入学式を行った。

どうでもいいがマジで青い制服って似合わねえな、てか青色って嫌いなんだが。まあ入学式と言っても鮫島校長のお話って感じだったかな。

そうそう、やはりこの世界は俺が実際にアニメや漫画で見た世界とは違っていた。

1つ目、オシリスレッドの寮がボロボロだったのがその何倍が大きくなっていた。昭和のアパートみたいだな。

2つ目、寧ろこれが一番の変更点だろうな。なんとオシリスレッドとライイエローに、女子生徒が存在するのだ。この世界では女子も実力で寮が決まるらしい。

どちらもいい変更点だな、とくに2つ目がいい。アニメとかを見ててそこら辺は気に入らなかったからな。

入学式を終えた俺がブルー寮に戻ろうとした時だった。

「待ってくれ！」

「あん？」

誰だ、話しかけてきたのは？そいつが大声で話しかけるもんだから全員こっち向いてるじゃねえか！ったく、面倒事は嫌いなんだがな。適当に無視しようとした俺だが話しかけてきた奴を見て気が変わった。相手があの三沢だったからだ。十代達もいるようだ。大方また俺が三沢に掴みかからないようにとのことなのだろう。

「待ってくれ、キルマ！」

「何の用だ？」

「この前は本当にすまなかった、俺のせいで不快な思いをさせてし

まって・・・」

「構わん、もう気にしちゃいない。」

「だがしかし、それでは俺の気が!・・・」

「やめろ、うつつうしい。本人が良いって言っているんだから良いんだよ、いちいち蒸し返すな。あと、すまないと思ってるならここで話しかけるな。全員こっち向いてるだろうが。」

「す、すまない・・・許してくれるのか?」

「ああ。」

「ありがとう、そして本当にすまない・・・」

どうやら話はそれだけのようだ。いつのまにか皆帰ってるな。俺もさっさと帰って飯の時間まで寝るとしよう、そう思っていたのだが・

「キルマ、俺とデュエルしようぜ!」

「開口一番、いきなり何言ってんだお前は?」

十代がデュエルを申し込んできたからだ。隣では翔と三沢もいきなり何を言い出すのかと言っている。

「何で俺がお前とデュエルしなくちゃならないんだよ?」

「だってお前強いじゃん、俺もお前とデュエルしてみてえ!」

・・・いつさい答えになってねーよ。

「断る。」

「ええ、何でだよ!?」

「何故かという興が、貴様のようなオシリスレッドの落ちこぼれ何ぞと、誇り高きオベリスクブルーの生徒がデュエルをするわけ無かるう!」人の話を聞けよ・・・」

この傲慢な口調、レッドの生徒を侮辱する言葉。こいつは間違いく……

「誰だお前？」

「お前、万丈目さん知らないのか？」

「学園最強の決闘者で、未来の決闘キングと名高いお人なんだぞ！」

やはり万丈目か。アニメの展開的にそろそろ出てくるころだと思つてたよ。相変わらず初期のこいつは嫌味だな。俺、初期のこいつ何よりも嫌いなんだよな……

というか学園最強は丸藤亮カイザーだろう？

「分かったならさっさと出て行け！ここはオベリスクブルーの生徒のみが使うことを許された神聖な場所だ！ここはお前らのようなドロップアウトボーイが入っていい場所では無い！」

「言いたいことはそれだけか？言い終わつたならお前のほうが出て行くんだな。」

十代達、そして万丈目とその取り巻きたちが驚いて振り向く。……しまった、こいつらみたいにエリートが正しいと盲信してる奴らは何よりも嫌いだからつい口を挿んじまつた。

「お前は確か獅子雄キルマだったな。何故同じブルー寮の生徒がオシリスレッドの落ちこぼれをかばう？」

「別にかばってるわけじゃねえ。俺はお前みたいにエリートが全て正しいなんて思っている奴は大嫌いなんだよ。特にお前のような二流の輩と同じように思われるのはな。」

「何だと？俺が二流だと！？」

万丈目とその取り巻きたちが激昂してこちらに向かってくる。

「そうだ、聞こえなかったのならもう一度言ってやる。お前らは二流だ。」

「訂正しろ、俺は二流などでは無い！」

「いいや。お前のように同じデュエリストをバカにするような奴は二流で十分だ。最も二流と呼ぶのもおこがましいがな。」

「貴様！・・・」

「辞めなさい、万丈目君！」

「そうよ、坊や。恥を知りなさい。」

俺に掴みかかる万丈目だが、上のほうから聞こえてきた声に動きを止める。・・・そういえば今の声って2つだったよな？片方は明日香だが、もう片方は誰だ？

「天城院君に藤原君じゃないか！何故君達が止める！？」

「いきなり人に掴みかかるうとしたら普通は止めると思うけど？」

「ふふつ。私はその坊やの言う通りよ。今のあなたで二流と呼ばれても仕方ないわ。だって、私も同意見ですもの。」

「何が止めると思うけどだ。最初から見ていて止める気何ぞ無かつたろうが。」

「気付いていたの！？」

「あんな下手な隠れ方でか？そのツインテールの方がまだマシだったぞ？」

あんな素人探偵みたいな隠れ方で何言っただこいつは・・・

「とにかく、話に入る分には構わないが、名乗るぐらいしたらどうだ？」

「あらあら、私としたことがごめんなさいね。私の名前は藤原雪乃。見ての通り、あなたと同じブルー寮の生徒よ。」

「・・・天城院明日香よ。」

そつか、こいつどこかで聞いたことがあると思ったらあの藤原雪乃か。TFでは随分と苦しめられたものだ。

「俺は獅子雄キルマだ。で？何の用だ？」

「あら、つれない人ね。もう歓迎会の時間だからそろそろ帰ったほうがいいんじゃない？」

「何？もうそんな時間か？」

そう言われて時計を見てみると確かにもうすぐ歓迎会が始まる時間だ。そろそろ帰ったほうがいいな。

「十代、三沢。お前達も早く帰ったほうがいい。藤原の言うとおり、もうすぐ歓迎会の時間だ。早く帰らないと飯、食いつぶれるぞ？」

「ん？もうそんな時間なのか？それは大変だな、俺もここで失礼させてもらつよ。」

「飯食えなくなるのか！？そりゃヤバい！帰るぞ、翔！」

「あ、待ってよアニキ！」

あ、もう翔はあいつをアニキ呼ばわりしてんのか。確か寮に帰ってからだろ？

「ふん、さつさと帰るんだな落ちこぼれが！」

「俺に言わせりゃお前もだけどな。」

「貴様、まだ言うか！」

「その辺にしなさい、万丈目君。」

「ふふつ、あまり反論すると自分がそうだと断言しているようなものよ？」

「くっ、失礼する！・・・」

藤原の言葉を聞いた万丈目は、挨拶もそこそこに寮に帰って行った。

「まったく、万丈目君にも困ったものね・・・」

「それに関しては同感だな。ブルーにはあんなのばかりなんだろうな。これなら入試で手を抜いておくんだったぜ・・・」

俺はため息をつく。そうすれば少なくともブルーに入れられることは無かっただろうからな。

「あら、それは困るわ。」

「あ？何でお前が困るんだよ？」

藤原の言葉に純粋に疑問を抱く。

「だって、あなたと会う接点が無くなってしまっじゃない。あなたには入学試験のこととか色々聞きたいことがあるのよ。そう、色々ね・・・」

そう言つて、妖艶に微笑む藤原。流石、TFで「アカデミアの女王」と呼ばれていただけの事はあるな・・・

「それはそれは・・・アカデミアの女王からの誘いとは光栄だな。」

いつもなら相手になどしない、特に女は。前にも話したが、前の世界でも様々なものを狙って特に女が俺に話しかけてきたからな。基本相手にしないんだが・・・

こいつみたいに純粋にこの「獅子雄キルマ」自身に興味がある奴は、

生きてきた中で片手で足りるほどの人数だけだったからな。少しこいつに興味が湧いてきた。

「あら、私のほうこそ光栄だね。まさかあなたに私の事を知ってもらえているなんて。」

「そりやどうも。・・・と、こんな所で話をしてる場合じゃないな。俺達も戻るとしよう。藤原、天城院。」

「私のことは雪乃と呼んで頂戴。」

「そうか？それなら俺もキルマで構わん。」

「・・・私の事も明日香で構わないわ。」

明日香も藤原に乗じて話す。しかし・・・

「お前、何でさつきからずっと黙ってたんだ？」

「・・・あなた達の会話に入れなかっただけよ・・・まったく雪乃ったら、あんなことを言うなんて・・・／＼／」

「あら、女として強い男に惹かれるのは当然のことよ明日香？」

「惹かれるって・・・／＼／」

どうやら色恋には耐性がないようだ。見てておもしろい。

「出るんじゃないかな・・・」

俺はブルー寮のテラスでため息をついていた。原因は今しがた行われているブルーの歓迎会だ。

確かに飯は豪華で美味いんだが、周りの奴らが酷過ぎる。なんせ全員自慢話しかないからだ。しかもいつも通り、俺に取り入ろうとする奴らが山のように来やがる。

それなのにこいつらは、上っ面はお上品ときた。俺でなくとも嫌になるう。いや、十代は豪華な飯の時点で喜びそうだな・・・

「部屋に戻るとするか・・・」

そう言って部屋に戻ろうとする俺だったが・・・

「ちょっといいかしら？」

雪乃がテラスに現れた。どうやら俺に用があるらしいな。

「部屋に帰るところだったがまあいい。で、何の用だ？」

「あら、忘れたの？デュエルフィールドでの件よ。」

そういえばあの後、寮に戻る途中で雪乃にシンクロ召喚に教えるように頼まれたんだっただな。時間がなかったから後で話すと約束して

「そういえばそうだったな、スマン。何が聞きたいんだ？」

俺は雪乃にせがまれシンクロ召喚について教えてやっていた時、一通のメールが入った。

『やあ、獅子雄。午前零時にデュエルスペースで待っている。互いのベストカードを賭けたアンティールで勝負だ。俺が二流で無いということを証明してやる。勇気があるんなら来るんだな。by 万丈目』

・・・馴れ馴れしい奴だな。てかどこで俺のメルアドを知ったんだ？というかだんだん原作に乗って行動しているな、原作に介入する

のはごめんなんだが・・・まあそれも運命だ。そう考えていると雪乃が覗き込んできた。

「人のメールを見るのはマナー違反じゃないのか？」

「ふふ、ごめんなさいね。それに関しては謝るわ。万丈目の坊やったら・・・あなたは行くの？」

「まさか、行く気はない・・・と言いたところだが、天狗の鼻を叩き折る意味でも応じてやるとするよ。」

「ふふ、あなたらしいわね。私も付いて行っていいかしら？」

「別に来たいのなら止めはしないが、バレると下手すりゃ退学だぞ？」

「その言葉、私こそあなたに返すわ。」

「俺はいいんだよ、俺に来たメールだからな。流石にお前が巻き込まれて退学なんざ後味が悪すぎる。」

「あら、心配してくれるの？ありがとう。」

そんなこんなで雪乃が付いてくることになった。途中で明日香も来ることになったが問題無いだろう。いや、実際には問題大有りなんだがな。

「よく逃げなかったな、ドロップアウトボーイ。そして獅子雄キルマ。」

デュエルフィールドには万丈目が仁王立ちしていた。というかこいつ、十代も呼んだってことは二人同時に相手するってことか？

「そんなわけなかつ、獅子雄キルマ、まずはお前からだ！」

心の中を呼んだのか、こいつは？まあいい、そんなことより・・・

「十代を呼んで良かったのか？このままじゃお前のデッキの構成を知られるぞ？」

「構わん。ドロップアウトボーイに対する俺からのハンデだ。デッキを知られたぐらいで負ける俺ではない！」

・・・どんだけ舐めきつてるんだこいつは。クロノスとのデュエルを見ていたんじゃないのか？

「さて、アンティに出すカードだが・・・お前はシンクロモンスター・・・アンデッド・スカル・デーモンを賭ける。」

普通こういうのはカードを自分で決めるものだろう、なんであいつは決めてるんだ？まあいい・・・

「俺が負けたら俺のデッキのカードを選べ。お前の気に行ったものをくれてやる。」

いちいち上から目線だな、こいつ・・・まあいい。というかカードなんぞいらん。この時代のカードなど全部持つてゐるからな。

「そんなものはいらん、その代わり俺が勝ったら一つだけ約束しろ。」

「なんだ、言ってみろ。」

「二度とオシリスレッドを侮辱するな。もちろんライイエローもだ。同じデュエリストとしてお前の行動は見てるだけで吐き気がする。」

「ふん、良いだろう。お前が勝つたらその条件飲んでやる。二度とレッドやイエローをバカにしないと誓おう。（くだらん、誓うわけ無いだろう。それに俺はシンクロモンスターを封じるカードを持っている。それがあある限り俺が負けることは無いからな。）貴様が無様に負けるところを天城院君や藤原君、ドロップアウトボーイに見てもらうんだな！」

「頑張れー、キルマ！」

「そうツス、頑張るツス！」

「負けちゃだめよ坊や！」

そういえば十代達、これでやっと台詞貰えたな・・・

キルマLP4000

万丈目LP4000

「「デュエル!!」」

「先攻はどっちが「先攻は俺だ！俺のターン、ドロー！」人の話を聞けよ。」

まあいい。こっちはシンクロ召喚を使うんだ。ハンデだと思えばいい。

「俺は手札からクリッターを守備表示で召喚！」

クリッター ATK1000/DEF600

「そしてターンエンドだ！」

クリッターだと？というか伏せないのか？アニメと同じ展開みたいだから出てくるのは地獄剣士だと思ったんだがな。どうやら完全

に一緒つてわけでもないらしい。
まあいい、アニメ通りだと面白みがないからな。少しは楽しめそう
だ。

「俺のターン！ドロー！俺は手札から魔法カード『ブラック・コア』
を発動！自分の手札を1枚捨てることで、フィールド上の表側表示
のモンスター一体をゲームから除外する！」

黒い球状のコアがクリッターを次元の狭間に送りこむ。

「ちいっ！これではクリッターの効果が使えん！」

どうやら俺が予想外の手を打ってきたもんだから動揺してるな。

「俺は手札からゴブリンゾンビを召喚！」

ゴブリンゾンビ ATK1100/DEF1050

「ゴブリンゾンビでダイレクトアタック！」

「ぐおおおっ！」

万丈目LP4000 2900

「ゴブリンゾンビの効果発動！このカードが相手に戦闘ダメージを
与えた時、相手はデッキの上からカードを1枚墓地へ送る！」

「何だと！？くっ！」

落ちたのは奈落の落とし穴か。アンデットは除外に弱いからな、運
がいい。

「俺はカードを三枚伏せターンエンド！」

さてここからどう挽回するつもりかな？

「くっ、俺のターン！ドロー！俺は手札から『強欲な壺』を発動！カードを2枚ドローする！ふっ、俺の勝ちは決まったも同然だな！」

何？何を引いたんだあいつは？

「俺は手札からデーモン・ソルジャーを召喚！」

デーモン・ソルジャー ATK1900/DEF1500

・・・何かと思えばバニラモンスターじゃねえか。攻撃力は勝っているがそれだけだろう？

「こいつはただの生贄にすぎん！俺は手札から魔法カード『二重召喚』を発動！この効果で俺はこのターンもう一度通常召喚を行うことが出来る！」

なるほど、手札にあるのは上級モンスターか。さて、何を出す気だ。まあ伏せてある奈落の落とし穴で・・・

「さらに手札から速効魔法『サイクロン』を発動！貴様の右のカードを破壊だ！」

ちっ、奈落の落とし穴が！まあいい、あいつが何を召喚してくるかな。

「さらに俺は手札から魔法カード『クロス・ソウル』を発動！これ

は相手フィールド上のモンスター一体を選択して発動する！このカードを発動したターン、自分のモンスターを生贄にする場合、自分のモンスター一体の代わりに相手のモンスターを生贄にしなければならない。」

なかなか考えたじゃないか、確かにこれなら俺のフィールドはがら空きになる。まあクロス・ソウルの効果でこのターン攻撃されることは無いがな。

「まだだ！俺はお前の場のゴブリンゾンビと、俺の場のデーモン・ソルジャーを生贄に捧げ、虚無の統括者を召喚する！」

「何だと！」

虚無の統括者 ATK2500 / DEF1600

「その顔から察するとこいつの効果を知っているらしいな！そうだが、虚無の統括者が表側表示で存在する限り相手はモンスターを特殊召喚することが出来ない！これでシンクロ召喚は封じたぞ！」

まずいな。確かにシンクロ召喚は特殊召喚、虚無の統括者がいたんじゃないやそれが出来ん。流石、ブルー寮のトップクラスのデュエリストだ。一度見ただけでシンクロ召喚の弱点を見抜きやがった！

「だがこの瞬間ゴブリンゾンビの効果発動！このカードがフィールド上から墓地に送られた時、自分のデッキから守備力1200以下のアンデッド族モンスター1体を手札に加える！俺はもう一体のゴブリンゾンビを手札に加える！」

「ふん、そんなその場しのぎのカードで何が出来る！虚無の統括者の攻撃力は2500、足元にも及ばん！カードを一枚伏せターンエ

ンドだ！」

確かにあいつの言うとおりだ、こいつは単なる気休めにしかすぎん。

「貴様の負けは決まったも同然だ！いまならサレンダーをすればカードは取らないでやる、さあどうする！」

だがこのデッキにはまだ逆転できるカードが残っている。だがそれにはあのカードを引かなければ！・・・

「何やってんだキルマ！お前がデッキを信じなくてどうすんだよ！」

十代！・・・たくあいつの言うとおりだな、俺がこいつらを信じなくてどうする。引いてやろうじゃねえか、あのカードをよ！

「俺のターン！ドロー！」

来た！あとはこいつが上手く決まれば！・・・

「俺は手札から魔法カード『天よりの宝札』を発動！」

「天よりの宝札だと！貴様、そんな超レアカードを持っていたのか！」

こいつは昔、大会で優勝した時に手に入れたカード。OCGでは使えないカードだったが、効果がアニメ版だから超レアカードになっている。

「その効果で互いのプレイヤーは手札が6枚になるようドローする！」

「ちいつ！」

これであいつらが来たら・・・よし！

「さらに『強欲な壺』を発動！カードを2枚ドローする！俺は手札からゴブリンゾンビを召喚！さらに手札から魔法カード『二重召喚』を発動！効果は言わなくても分かるよな？そして俺はゴブリンゾンビをリリースし、真紅眼の不死竜をアドバンス召喚！」

真紅眼の不死竜 ATK 2400 / DEF 2000

フィールドにレッドアイズをおぞましくしたモンスターが召喚される。

「レッドアイズだと！？それにアドバンス召喚！？」

「違うな、こいつはレッドアイズの亜種とも言うべきカード、レッドアイズ・アンデットドラゴンだ。もちろん、アンデット族だ。」

そしてアドバンス召喚とは早い話が生贄召喚だ。」

「そして俺は手札から永續魔法『一族の結束』を発動！このカードは俺の墓地のカードの種族が1種類の時、俺の場のその種族とおなじモンスターの攻撃力を800ポイントアップする！」

「攻撃力3200だと！」

「虚無の統括者を上回ったわ！」

「これで真紅眼の勝ちだ！」

そっぴやいたな雪乃達。すっかり忘れてたぜ

「まだだ！俺は手札から速効魔法『突進』を発動！フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動することが出来る！そして選択したモンスターの攻撃力はエンドフェイズまで70ポイントアップする！」

真紅眼の不死竜 ATK3200 3900

「攻撃力3900！」

「バトルだ！真紅眼の不死竜で虚無の統括者を攻撃！『コルプションフレア』！」

「その攻撃は通らん！リバースカードオープン！罠発動『炸裂装甲』！このカードは相手モンスターの攻撃宣言時に発動することが出来る！攻撃宣言を行ったモンスターを破壊する！」

「残念だがそれは無理な相談だ！リバースカードオープン！速効魔法『我が身を盾に』！このカードは1500ポイントのライフを払うことで発動することが出来る！相手が発動した『フィールド上のモンスターを破壊する効果』を持つカードの発動を無効にし破壊する！いけ、レッドアイズ！」

「何！？炸裂装甲が！？」

キルマLP4000 2500

炸裂装甲がレッドアイズから我が身を盾にへと対象を変更される。

「ぐああっ！」

万丈目LP2900 1500

「（だが次のターンに手札の死者蘇生を使えば！）「まだだ！罠発動！『デスペレイド・バトル』！」

このカードは俺のターンのバトルフェイズにのみ発動できる！自分フィールド上のモンスター1体の攻撃力をバトルフェイズ終了時まで1000ポイントダウンさせることでこのターン、対象となったモンスター1体は2回攻撃を行う事ができる！」何だと！？」

真紅眼の不死竜 ATK 3900 2900

レッドアイズの攻撃力は下がったが問題ない。フィールドにいつを守るカードは何もない。

「2回目の真紅眼の不死竜の攻撃！これで止め「ガードマンが来る！アンティールは校則で禁止されている、時間外に施設を使っているし、校則違反で退学かもよ！」ここに来るのか！？」

なんでこれで勝ちって所で来るんだよ！たくしゃあねえ！

「雪乃、明日香、十代、翔！ずらかるぞ！」

「ま、待て！貴様から情けはうけん！俺を倒してからいけ！」

「知るか！とっ捕まるのはごめなんだよ！」

万丈目が実に男らしく叫ぶがそんなこと俺の知ったことじゃない。

4人とともに逃げ出そうとする。だが・・・

「何やってんだ雪乃、さっさと来い！」

「ま、待って！あなたのデュエルで真紅眼の不死竜を見てから腰が抜けちゃって！・・・」

何い！？何やってんだあいつは！？ええい世話の焼ける！

「きゃ！ちょ、何を！・・・」

「うるせえ黙ってる！舌噛むぞ！」

俺は雪乃を背負い、そのまま走りだした。

デュエルアカデミア前

「ったく、一時は、どうなる事かと、思った、ぜ・・・」

軽いとはいえ、流石に人一人を背負って走るのは少し無謀だったようだ。動けねえ、そして情けねえ・・・

「・・・なさい。」

「あん？何だつて？」

雪乃が何か言ったが、声が小さく聞き取れない。

「ごめんなさいね、私のせいで。あなたに迷惑を掛けてしまって・・・」

何かと思えばその事か。確かに疲れはしたが別に気にしちやいないんだがな。

「別にかまわん。誰にだって怖いものくらいあるだろう、別におか

しいことじゃない。」

「でも・・・」

「まったく、いつもは無駄に女王なのに何でこんな時だけ大人しくなるのかねこいつは。」

「はあ、この話はもう終わりだ。早く帰らないとまた見つかったまう。それだけは避けないとな。」

「あーあ、俺も万丈目とデュエルしたかったぜ・・・」

「まったく気楽な奴だ。こっちだって天よりの宝札が来なかったらヤバかったんだぞ？」

「勝手にいつてる。俺たちはこっちだからまたな。」

「おう、じゃあな！」

「キルマ君も明日香さんも雪乃さんもお休みです！」

「ああ、お休み。」

「そういつて十代達は帰って行った。」

「さて、俺達も帰るか。歩けるか雪乃？」

「ええ、もう大丈夫よ。」

「そうか、じゃあ行くぞ。」

「俺たちはブルー寮まで行って、そこからそれぞれ男子棟と女子棟に別れた。」

「じゃあな、お休み。」

「お休みなさい。」

「お休みなさい、キルマ。」

ん？今、俺の事呼ばなかったか？

「どうした、俺は坊やからランクアップしたのかな？」

「ええ、私を背負って走るキルマ、とても凛々しかったわ。だからこれは私からのご褒美。」

「そいつはどうも。それじゃあな。」

どうやら本当に俺は坊やからランクアップしたらしい。いまさらだが、人生何が起こるかかわからんな。

そう思い、俺は男子棟へ帰って行った。

女子 side

「珍しいわね、雪乃が坊や呼ばわりをしないなんて。」

実際は珍しいなんてものじゃない。私を知る限りでもほんの一握りの人間しかいないのだから。

「ふふっ、私はもうあの人に心奪われてしまったわ。元々最初からあの人に興味はあったけれど、まさかこんなことになるわね。」

そついう雪乃はなんだかとても楽しそうで、とても美しかったわ。同じ女である私も思わず見とれてしまうくらいに。

「あら、どうしたの明日香？顔が真っ赤よ？」

「な、何言ってるの、そんなわけないじゃない！」

全く、本当に何を言っているのかしら・・・でも・・・

「頑張つてね雪乃。私もできるだけ応援させてもらうわ。」

「あら、それは心強いわね。」

私達はそう言つて笑いながら女子棟へ歸つて行くのだった。

TURN 02 傲慢という名の暴力（後書き）

キ「さて、今回の最強カードは・・・天よりの宝札だな。」

天よりの宝札 通常魔法

このカードはメインフェイズの初めにしか使用できない。互いのプレイヤーは手札が6枚になるようにカードを引く。

キ「効果はアニメ版だ。OCG効果だと流石に使いづらすぎるからな。だが相手にもアドバンテージを与えてしまいうリスクなカードでもある。」

実際にTFでも加えられればいいのに・・・これを何度思った事か。基本ドロー運がない作者にとっては喉から手が出るほどほしい完全アニメオリジナル効果を持つカードです。

とにかく遊戯王はデュエルを考えるのが大変ですがなんとか頑張っていくつもりなので応援よろしく願います。

TURN03 エリートの誇り（前編）（前書き）

この前、さっそく感想第一号が来ました。

明日香をヒロインに加えて欲しいとのことですが、主人公のハーレムメンバーは決まっているので無理です。すいません。

TURN 03 エリートの誇り（前編）

「それではこれより、シニョール・キルマ対シニョール万丈目のデュエルを開始するノーネ！」

「来い、獅子雄キルマ！貴様に勝って俺は失くしたプライドを取り戻す！」

「やれるものならやってみろ！」

「デュエル！！！！」

獅子雄キルマ LP 4000

万丈目準 LP 4000

俺は万丈目からの挑戦を受け、全校生徒の見守る中デュエルをすることになった。

何故こうなったかと言うとそれは先日の出来事に遡る。

先日行われたデュエルアカデミアの試験。実技試験会場では十代と万丈目が戦っていた。

万丈目曰く本当は俺とこの前の決着をつけたかったらしいが、クロノスの頼みの手前、まずは十代を倒すことにしたらしい。しかし・

「来たぜ相棒！俺は手札2枚をコストに、進化する翼を始動！」

ハネクリボーの背中に進化する翼が装着され、ハネクリボーがLV10へと進化した。

「こいつの効果は、その身を犠牲に攻撃表示モンスターを全て破壊し、その攻撃力と同じダメージを相手プレーヤーに与える！ハネクリボー、全エネルギーをあいつに返してやれ！」

十代の指示に対してハネクリボーは万丈目のVWXYZを破壊し、ヴァイトウズイ全エネルギーを万丈目に撥ね返す。

これで万丈目のライフは残り1000。

返しのターンで十代がフェザーマンを召喚し、ダイレクトアタック。見事万丈目を打ち破った。

「ふふ、万丈目の坊やもついてないわね。十代の坊やが攻撃力1000以上のモンスターを引くなんて。」

俺の横でデュエルを見ていたのは雪乃だ。こいつは俺と万丈目との深夜のデュエルの翌日から、俺の格が上がったとかで終始俺の傍にいたようになった。

まあ俺もこいつは他の奴と違い、俺個人に興味を持っている珍しい奴なので特に邪険にすることなく行動を共にしている。

「あれが運だとしても、まぎれもなく十代の実力だな。」

「あら、どういふことかしら？」

「たとえ引き当てたのが偶然でも、十代はそれを引き当てた。不可能を可能にすることも立派な実力だ。」

それに運も実力のうちという言葉もあるだろう？」

「なるほど、実に説得力があるわね。」

そんなこんなで試験が終了した。俺達の結果はどうだったかって？
勿論そろって完勝に決まってるだろう？

そして件の事が起こったのは試験が終了した翌日だった。

「獅子雄キルマ、俺とデュエルをしろ。」

朝食の席で、万丈目がいきなり俺にデュエルを挑んで来たのだ。

「いきなり何なんだお前は？」

「今言ったとおりだ、俺とデュエルをしろ。」

だからそういうことを聞いているんじゃないんだがな。せめてそういう事は朝食が終わってから言ってもらいたいものだ。

「俺は先日十代に負けた。これはこの学園の全員が知っていることだ。」

確かに。あれはちょうど実技試験の日だったからな。知らない奴はおそらくいないだろう。

「奴のおかげで俺のプライドは粉々にされ、俺はオシリスレッドに負けたオベリスクブルーの生徒として恥を晒すことになった。」

だが、もし現在学園の中でも最強と名高いお前を倒せば、辱められた俺の名は瞬く間に払拭される。

だから俺とデュエルをしろ。それに、俺は深夜のデュエルで負けていたのに、邪魔が入ったせいで貴様に情けを掛けられるという醜態を晒した。だから前回の決着をつける意味でも、そして貴様に勝つて俺のプライドを取り戻すため獅子雄キルマ、俺は貴様にデュエルを申し込む！」

万丈目の実に長い主張が終わった。なるほど、俺に勝ってプライドを取り戻したいというわけか。

これがもし、十代に負けたために半ば自暴自棄に俺に挑戦をしてきたのなら断るつもりだったんだが、ここまでの覚悟を示されたのならここでデュエルを受けないわけにはいかないな。

「氣に行ったぜ万丈目。いいだろう。そのデュエル、受けさせてもらおうじゃないか。今回は俺も本気で行かせてもらうことにしよう。」

デュエルの開始が決定した後、雪乃が話しかけてきた。

「あなたの本気のデュエルが見られるなんてね。万丈目の坊やには感謝しなくちゃ。」

「何を呑気なことを・・・下手すればこっちが負けるかもしれないんだぞ？」

「あら、あなたまさか負ける気なのかしら？」

「それこそまさかだな。ただ、今の万丈目に油断していると足元を掬われるってことだよ。」

「ふふっ、私は明日香や十代の坊やたちと一緒に応援させてもらうから負けちゃダメよ？」

そして冒頭に移るのであった。

「万丈目、今回は俺が先攻を貰う！俺のターン！ドロー！俺は手札からクリッターを守備表示で召喚！」

クリッター ATK1000 / DEF600

「カードを一枚伏せターンエンド！」

「俺のターン！ドロー！俺は手札から召喚僧サモンプリーストを召喚！このカードは召喚・反転召喚に成功した時、守備表示になる！」

召喚僧サモンプリースト ATK800 / DEF1600

レベル4モンスター専用のリクルーターか。手札コストが必要になるが、VWXYZシリーズには持って来いのカードだな。

「召喚僧サモンプリーストの効果発動！1ターンに1度、手札から魔法カード1枚を捨てる事で、デッキからレベル4モンスター1体を特殊召喚する！現れる！V-タイガー・ジェット！」

V-タイガー・ジェット ATK1600 / DEF1800

「さらに俺は手札から永続魔法『前線基地』を発動！1ターンに1度、自分のメインフェイズ時に手札からレベル4以下のユニオンモンスター1体を特殊召喚する事ができる！来い、W-ウイング・カタパルト！」

W-ウイング・カタパルト ATK1300 / DEF1500

「そしてV-タイガー・ジェットとW-ウイング・カタパルトを合体！現れる！VW-タイガー・カタパルト！」

VW - タイガー・カタパルト ATK 2000 / DEF 2100

いきなり来たか！しかもこのままだと！・・・

「VW - タイガー・カタパルトの効果発動！手札を1枚捨てることで相手モンスター1体の表示形式を変更できる！」

クリッター DEF 600 ATK 1000

「そしてクリッターに攻撃！」

「ちいっ！」

キルマLP 4000 3000

VW - タイガー・カタパルトの攻撃でクリッターが破壊される。

「だがこの瞬間クリッターの効果発動！クリッターがフィールドから墓地へ送られた時、デッキから攻撃力1500以下のモンスター1体を手札に加える！」

「俺はカードを一枚伏せターンエンド！」

まさか1ターン目でVWXYZ召喚のためのモンスターの1体を揃えるとはな。

だが、それでこそ倒しがいがあるってもんだ。

雪乃side

「そしてV - タイガー・ジェットとW - ウイング・カタパルトを合

体！現れる！VW・タイガー・カタパルト！」

私は今、キルマと万丈目の坊やのデュエルを明日香と十代の坊やたちと一緒に観戦していた。

「すげえ！万丈目のやつ、1ターン目で上級モンスターを召喚しまった！」

「本当ね、驚いたわ・・・」

「万丈目君、すごい気迫ツス・・・」

「万丈目の坊やもそれだけ本気ってことね。」

あの時はキルマの負けるかもしれないと言ったことが信じられなかったけれど、これを見たからにはそうなるかも知れないと思ってしまっわね・・・それでも

「大丈夫よ。キルマは万丈目の坊やに負けるなんてことは無いわ。」

そう、私が認めた男が負けるなんて許さないわよキルマ。

キルマ side

「俺のターン！ドロー！俺は手札から永続魔法『次元の裂け目』を発動！このカードがフィールドに存在する限り、墓地へ送られるモンスターは墓地へは行かず、除外される！さらに永続魔法『魂吸収』を発動！このカードがフィールドに存在する限り、俺はカードがゲームから除外されるたびに、除外されたカード1枚につき500ポイントライフを回復する！」

「モンスターの永続の除外効果にを除外されることでライフを回復するカードだと！まさかそのデッキは！・・・」

「お前の予想通りだよ。こいつは除外専門のデッキだ。」

そう、これは墓地で効果を発揮するアンドットデッキとは対称に、除外することで効果を発揮する除外デッキだ。アンドットデッキに続いて俺の主力のデッキの一つだ。

「さらに俺は魔法カード『ブラック・コア』を発動！手札を1枚捨て相手モンスター1体を除外する！

捨てたカードがモンスターカードのために除外され、魂吸収の効果発動！ライフを500回復する！そして俺が除外するのはVW・タイガー・カタパルトだ！」

キルマLP3000 3500 4000

「くっ！削ったライフが戻ったと！・・・」

「そして墓地のブラック・コアを除外することで『マジック・ストライカー』を特殊召喚！魂吸収の効果でさらに500ポイントライフを回復する！」

マジック・ストライカー ATK600/DEF200

キルマLP4000 4500

「マジック・ストライカーは墓地の魔法カードを1枚除外することで特殊召喚できる！いけ、マジック・ストライカー！」

「無駄だ！俺の場にはブリストが残っている！ダメージを食らうのはお前だ！」

「いいや、マジック・ストライカーは相手プレイヤーに直接攻撃をすることができる！マジック・ストライカーで万丈目にダイレクトアタック！」

「何だと！？ぐわっ！」

万丈目LP4000 3400

「俺はカードを一枚伏せターンエンドだ！そして除外ゾーンから『異次元の偵察機』を特殊召喚！このカードは除外されたターンのエンドフェイズにフィールドに特殊召喚される！」

異次元の偵察機 ATK800/DEF1200

すげえ、１ターンでライフを1500も回復した。流石だな。

万丈目じゃ無理だな、実力が違いすぎる。このまま負けるのがオチだな。

観客から心ない言葉が放たれる。こいつら・・・

「・・・奴等には勝手に言わせておけばいい。十代に負けた時点で俺のプライドは粉々に砕け散ったからな、何を言われても構わん。だが、俺は負けん！俺のプライドを取り戻すため、そして俺こそが学園でも最強のデュエリストだと証明するために俺はお前に勝つ！俺のターン！ドロー！俺は魔法カード『天よりの宝札』を発動！その効果で互いに手札が6枚になるようにドローする！」

な！？あいつもあのカードを手に入れたのか！？手札が1枚から一気に6枚！

「俺はサモンプリーストの効果を発動！手札の魔法カードを捨て、デッキからレベル4以下のモンスターを特殊召喚する！俺は『X-ヘッド・キャノン』を選択する！」

X・ヘッド・キャノン ATK1800/DEF1500

「さらに俺は前線基地の効果発動！手札からレベル4以下のユニオンモンスター1体を特殊召喚する！
来い、『Y・ドラゴン・ヘッド』！」

Y・ドラゴン・ヘッド ATK1500/DEF1600

「そして俺はZ・メタル・キャタピラーを通常召喚！」

Z・メタル・キャタピラー ATK1500/DEF1300

まずい！X、Y、Zが揃った！

「俺はX、Y、Zを合体させ、『XYZ・ドラゴン・キャノン』を特殊召喚！」

XYZ・ドラゴン・キャノン ATK2800/DEF2600

「呼ばれたか！だが魂吸収の効果で俺は1500ポイントライフを回復する！」

キルマLP4500 6000

「だがVW・タイガー・カタパルトがない限りVWXYZ・ドラゴン・カタパルトキャノンを呼ぶことは「まだだ！俺は魔法カード『次元融合』を発動！ライフを2000払い、互いに除外されているモンスターを可能な限り特殊召喚する！」なんだと！？」

万丈目LP3500 1500

万丈目の場にX、Y、Z、VWの4体が特殊召喚された。俺に特殊召喚できるモンスターはいない！

「俺はVWとXYZを合体！現れる『WXYZ・ドラゴン・カタパルトキャノン』！」

VWXYZ・ドラゴン・カタパルトキャノン ATK3000/D
EF2800

「だがVWとXYZが除外されたため、俺のライフは1000回復する！」

キルマLP6000 7000

「だがそれがどうした！貴様の場のモンスターは1体のみ！対する俺の場にはモンスターが4体！これで俺の勝ちが決まったも同然だ！」

雪乃side

「まさか万丈目の坊やがあんなカードを持ってるなんてね・・・」

先ほどまでキルマが圧倒的に有利だったのに、万丈目の坊やが次元融合を使ったため、WXYZが特殊召喚されてキルマが一気に不利になってしまったわね。ライフを7000まで回復したのはいいけれど、このままではキルマは負けてしまうわ！

「すげえ！すげえよ万丈目！やっぱお前はめちゃくちゃ強いぜ！」

・・・十代の坊や、あなたキルマの応援をしているということ忘れてるんじゃない？

明日香や翔の坊や、三沢の坊やも呆れてるわよ？

「・・・とにかくすごいわね万丈目君。いつきにVWXYZを召喚してしまうなんて。」

「ああ、あれには驚いたよ。この状況であのカードを引くなんて・・・なんて運なんだ。」

「・・・認めたくはないけれどあれも万丈目の坊やの実力よ。」

皆が怪訝そうに振り向いたので私はキルマから教わったことを話した。

「不可能を可能にすることも立派な実力、か・・・」

「確かに今の万丈目君を見ていると納得がいくわね。」

どうやらみんな納得したようね。

「ところでキルマの場にはモンスターと伏せカードが一枚。対する万丈目の場にはモンスターが4体。もう勝負は決まったようだね。」

「そんなことは！・・・」

「いや、まだわからないぜ三沢！」

三沢の坊やに反論しようとした私だけど十代の坊やの言葉に動きが止まる。

「まだキルマは諦めていないみたいだからな！」

「しかし、この状況を変える策があるのだろうか？」

「・・・確かにキルマならやりかねないわね。」

私の言葉に皆が振り返る。もう、またなの？・・・

「彼は私が認めた男、そう簡単に負けてもらっては困るわ。」

そう、困るのよ。だから勝ちなさい、キルマ！

キルマ side

勝ちなさい、キルマ！

そんな雪乃の言葉が聞こえたような気がした。

「全く無茶言う女だな・・・」

だが女にそこまで言わせたんだ、負けるわけにはいかないだろ！

俺の手札は6枚、万丈目の行動次第ではなんとかなる！

俺は万丈目の次の一手に全てをかけることにした。

TURN 03 エリートの誇り（前編）（後書き）

キ「今回の最強カードは・・・次元融合だ。」

次元融合 通常魔法

2000ライフポイントを払う。お互いに除外されたモンスターをそれぞれのフィールド上に可能な限り特殊召喚する。

キ「このカードは『闇の誘惑』で強力な闇属性モンスターを除外してからの使用が流行ったため、2008年に禁止カードに指定されたカードだ。」

除外デッキはタッグフォースでも結構勝率がある優秀なデッキです。まあ、相手のモンスターも特殊召喚してしまうのでデッキには入れていませんが・・・

遊戯王はネタは出てくるけど、そこからデュエルに繋いでいくのが結構難しいですね。やりがいがあります。

TURN04 エリートの誇り（後編）（前書き）

- ・ 本日2連続投稿です。ネギまより感想来るのが早い気がするなあ・
まあいことなんですが。

TURN 04 エリートの誇り（後編）

「俺はVWXYZ・ドラゴン・カタパルトキャノンの効果発動！1ターンに一度、相手フィールド上のカードを1枚除外することができる！俺はマジック・ストライカーを除外する！『VWXYZ・アルティメット・デストラクション』！」

「だが、魂吸収の効果によりライフを500回復する！」

キルマLP 7000 7500

「構わん！俺はZ・メタル・キャタピラーで異次元の偵察機に攻撃！」

「ぐああっ！」

キルマLP 7500 6800

「だが異次元の偵察機が除外されたことでライフを500回復する！・・・」

キルマLP 6800 7300

「そしてX・ヘッド・キャノン、Y・ドラゴン・ヘッド、VWXYZ・ドラゴン・カタパルトキャノンでダイレクトアタック！」

「ぐあああっ！！！」

キルマLP 7300 5500 4000 1000

「俺はこれでターンエンドだ！これで俺の勝ちが決まったようなものだ！」

「この瞬間、異次元の偵察機は自身の効果で俺の場に戻ってくる！
・・」

異次元の偵察機 ATK 800 / DEF 1200

雪乃 side

「俺はこれでターンエンドだ！これで俺の勝ちが決まったようなものだ！」

「この瞬間、異次元の偵察機は自身の効果で俺の場に戻ってくる！

・・」

「それがどうした！たかだ攻撃力800程度のモンスターで何ができる！」

万丈目の坊やの攻撃で、キルマのライフが1000になってしまったわ！しかもキルマの場のモンスターは攻撃力800の異次元の偵察機1体のみ。この状況ではもう・・・

「いや、お前は致命的なミスを犯した！」

「なに！？」

「お前はマジック・ストライカーではなく次元の裂け目を除外するべきだった！俺の手札にはこの状況を逆転できるカードが1枚ある！」

「なんだと！」

「最も、そのカードの発動条件である俺の除外されたカードが7枚以上という条件を満たしてはいないがな。だが俺のもう一枚の手札がそれを可能にする！」

いえ、キルマはまだ諦めていない！この状況を引っくり返せると言うの！？

「だけどそのカードが発動できないんじゃないじゃ意味が無いッス！」

「翔の言う通りだ。どんなに強力なカードでも発動できなければ！
・
・
」

「大丈夫だ！キルマなら出来る！」

十代の坊やの言葉に明日香たちが振り向いたわ。

「自分のデッキを信じればデッキは応えてくれる！キルマもそれを信じているからな！」

「そうね、十代の言う通りよ。キルマならこの状況でもどうにかできる。私もそんな気がするわ。」

明日香が十代の坊やの意見に賛同する・・・そうね、キルマなら出来るかもしれない。いえ、絶対出来るわ！だから！・・・

「勝ちなさい、キルマ！」

またも雪乃の声が聞こえる。そんなの当たり前だろ？

「さあ応えてくれよ、俺のデッキ！俺のターン！ドロー！俺は手札から魔法カード『未来破壊』を発動！このカードは俺の手札の枚数分、デッキからカードを墓地に送る！」

「デッキからカードを墓地に送るだ！」

「そうだ！俺の手札は6枚！よってデッキから墓地に遅れるのは6枚！もしその中の5枚がモンスターカードなら俺の最後の切り札を発動できる！だがもし、墓地に送ったモンスターカードが5枚未満なら！・・・」

「俺の勝ちということか！だがそう簡単にモンスターカードを5枚

も引けるものか！」

「それは神のみぞ知るってな！」

そう言い、キルマがデッキをめくる。

「さて、引いたのはどれだ？見せてみる！」

万丈目の坊やの言葉にキルマがデッキからめくったカードを見せる。
一体何だったの！？

・・・ああ！

「デッキの上からめくったカードは1枚を除き後は魔法と罠か！どうやら勝利の女神は俺に味方をしたようだな！」

「そんな！」

「デッキがこたえてくれなかったのか！・・・」

「これでキルマは・・・」

「負け・・・」

無情にもめくったカードの中にモンスターカードはたったの1枚。
どうやらこれで終わりのようね・・・

「いや、俺の勝ちだ。」

『！！！！！！』

「なんだと！？何を言っている！？お前がめくったモンスターカードは1枚！その切り札とやらは発動できないはず！・・・」

「いいや、デッキはちゃんと応えてくれたようだぜ？俺は今しがた除外された『ネクロフェイス』の効果発動！このカードがゲームか

ら除外されたとき、互いのプレイヤーはデッキの上からカードを5まい除外する！」

「なんだと!？」

まさか除外されることでデッキからカードを除外するカードがあるなんて!

私は信じられない面持ちでキルマを見る。その顔はデッキが応えてくれるという自信に充ち溢れていた。

「ふふつ、私としたことが途中で勝負を諦めてしまったなんてね・・・」

本当に情けないわ・・・でも本当にすごいわ。さすが私が認めた男・・・

「カードが合計で11枚除外されたことでライフが5500回復する!」

キルマLP1000 6500

「そして俺は魔法カードを発動!『カオス・エンド』!このカードは俺の除外されたカードが7枚以上の時発動できる!このカードはフィールド上のモンスターカードを全て破壊する!」

「何!？」

カオス・エンドの効果でフィールドのモンスターが一掃されたわ!

「すごいッス!・・・」

「これがキルマの切り札、カオス・エンドか!・・・」

「発動条件は厳しいが、除外デッキならその条件も大して難しいも

のではない。なんて強力なカードなんだ・・・」

「除外デッキ専用の『ブラック・ホール』というべきカードね。」

キルマside

「そして俺は『異次元の女戦士』を召喚！」

異次元の女戦士 ATK1500/1600

「攻撃力1500・・・どうやら俺の負けのようだな。だがおもしろいデュエルだったよ。」

「ああ、俺もだ。異次元の女戦士でダイレクトアタック！」

万丈目LP15000

「勝者、シニョール・キルマ、ナノーネ！」

ワアアアアアアアアアアッ！！

デュエルフィールドに観客の歓声が響き渡る。

「完敗だな・・・」

「そうでもないさ。あそこで除外されたのがネクロフェイスでなければ俺の負けだったからな。お前は強いよ、万丈目。誰が何と言お

うとな。」

「その言葉、素直に受け取っておこう。」

「二人ともお疲れ様。」

俺達を労う言葉に振り向くと、そこには雪乃達がいた。

「キルマも万丈目もすげえよ！ホント楽しいデュエルだったぜ！」

「アニキがやったわけじゃないでしょ！でも二人とも本当にすごかったッス！」

「本当にすごかったわ、二人とも。」

「ああ、本当にすごかった。俺もこれで最強のデッキ完成に一步また近づいたよ。ありがとう。」

皆が俺たちに労いの言葉を掛ける。三沢は微妙に違うがな。

「キルマ。」

「ん？なんだ？」

そんな中、雪乃が俺に話しかけてきた。なんかたくらんでいうような気がするんだが？

「あら、心外ね。勝者にご褒美をあげようと思っただけよ。」

ご褒美だ？ほう、一体何をくれるつもりなのかな？

「ふふ、これよ。」

雪乃は艶やかに笑うと俺に近づいて来て俺の頬にキスをした。

「！？どういっつもりだ？」

「あら、言ったでしょ？勝者へのご褒美だって。」
「・・・そりゃどーも。」

まさかキスをしてくるとは思わなかったがな。てかここでされると周りからの反応が面倒なんだが・・・

「キルマ・・・貴様あ！藤原君からのキスだと！もう一度俺とデュエルだ！今度は俺が勝ち、藤原君からのキスを貰う！」

「あら、私の唇はキルマ専用よ？」

「グツ！ならば天城院君！・・・」

「お断りします！！」

まったく、思った通りかよ・・・

「なあ、なんで皆あんなに騒いでんだ？」

「アニキ・・・」

「それは鈍すぎるぞ十代・・・」

十代の分かっていない反応もどうかとは思っがな・・・

万丈目を（物理的に）おとなしくさせた俺達は、寮へと帰る途中だった。ちなみにおとなしくなった万丈目は十代が担いでいる。

「まったく、お前が衆目の目の前でキス何ぞするからだぞ？」

「あら、いやだったかしら？」

「そういうことを言ってんじゃねえよ・・・」

「そつよ雪乃。皆の前であ、あんなこと・・・／＼／」

「あら、明日香には刺激が強すぎたかしら？ふふつ、可愛い子？」

「ゆ、雪乃!!」

「・・・今日は疲れた。さつさと寮に戻って寝ると・・・っと!」
「きゃあ!?!」

寮に戻って飯の時間まで寝ることを決め寮へと歩を進めていたが、途中で女子生徒とぶつかってしまった。

「ああすまん。大丈夫か?」

「は、はい、大丈夫です。あうう・・・私のほうこそすみません。急いでいたものでして・・・」

よく見てみるとこいつオシリスレッドだな。

オベリスクブルー以外の女子を見るのは初めてだから新鮮だな。

「ああ!あなた、さつきオベリスクブルーの人とデュエルしてた獅子雄キルマさんですよね!?!さつきのデュエルすごかったです!」
「あ、ああ。そりやどうも。」

見るからに天然オーラが見える奴だな。こういうタイプはなかなかペースをとれないから苦手なんだよな・・・

「ところで誰だお前?」

「はうう!?!す、すみません。自己紹介もせずに・・・私、宮田ゆまっって言います!」

宮田ゆま・・・思い出した!十代とは別のE・HERO使いの女だ!こいつ苦手なんだよな・・・

「どうしたの、キルマ？黙り込んで？」

「あ、ああ。いや、何でもない。」

「あああー!!」

な、何だ一体！？大声あげるなよ！？

「私、レポート提出しなきゃいけないでした！すみません、失礼します！」

そういうと宮田ゆまは大急ぎで図書室に向かっていった。ふう、やれやれだな・・・

「ふふっ、どうしたの？彼女に押されっぱなしじゃない？」

「天然は苦手なんだよ・・・どうもペースが掴めん・・・」

「あら、あなたにも苦手なものがあったのね。」

当たり前だ、お前は俺を何だと思ってやがる？

「デュエルが強い、私が認めた男だけど？」

そりゃ、どーも。

宮田ゆまとの遭遇で万丈目とのデュエルより疲れた俺だった。

TURN04 エリートの誇り（後編）（後書き）

キ「今回の最強カードは・・・カオス・エンドだ。」

カオス・エンド 通常魔法

自分のカードが7枚以上ゲームから除外されている場合に発動する事が出来る。フィールド上に存在する全てのモンスターカードを破壊する。

キ「本文の中でも説明があつたが、これは除外デッキ専用のブラック・ホールと考えてもらえばいい。ブラック・ホールは制限カードだから除外デッキなら第2のブラック・ホールとして活躍できるぞ。」

やっと前後編書き終わった・・・遊戯王はネタは出てきやすいけどデュエルを書くのが難しいですねー、ホント。

頭の中では小説が出来ているのに、文章で表すとなると難しいな小説って（泣）

今回ラストに出てきた宮田ゆまちゃん・・・大好きだー！！

いやもうホント好きです！Rはタッグフォースは5からしかやってませんがゆまちゃんはそのなかでも大好きなキャラです！

まあモブで一番好きなのはゆきのんですが。

TURN05 麗しき賭け (前書き)

今回は結構やりたい放題で結構アダルトテイストかも？
ゆきのんは俺の嫁！という方はご注意ください。

TURN 05 麗しき賭け

「許さんぞキルマ！貴様など負けてしまえ！！」

「リア充爆発しろッス！！」

「二人とも頑張ってくださいーい！！」

「キルマも雪乃も頑張れー！！」

「十代／＼アニキ！！」

「何で俺だけー！？」

「はう！？み、皆さんやめてくださいーい！？」

「お、落ち着け二人とも！」

「ふふっ、お手柔らかにね。」

「い、いけない香りがするんだな・・・」

「なんでこんなことに・・・」

「それは俺のセリフだ・・・」

万丈目と翔が野次を飛ばし、ゆまと十代が二人を応援し、十代の応援に万丈目と翔が反応して十代に詰め寄り、それをゆまと三沢が止めにかかるという何とも力オスな状況になったのには朝のある出来事が原因だった。

「あら、何かしらこのデツキ？」

「いきなり失礼よ雪乃。」

きっかけは雪乃が一つのデツキを見つけたことから始まった。

「人の部屋を漁るなよ。」

まったく何やってんだコイツは？人の部屋に来たと思ったらいきなり漁りやがって。

「お前も止めるよ明日香・・・」

「ご、ごめんなさい。ホラ、雪乃も。」

「あら、ごめんなさい。ところでそのデッキは？見たところシンクロモンスターばかりだけど？」

「お前謝る気ないだろ・・・まあいい、これはシンクロ専用につつたデッキだ。」

そっぴや昨日デッキ調整したんだっけ。まあ調整といってもデッキの回転のおさらいだけだな。

「シンクロデッキ！？あれはアンデット族専用のモンスターじゃないの！？」

「まさか。儀式モンスターや融合モンスターと一緒に種族は色々ある。この学園で使ったのがアンデット一種族なだけだ。」

まあアンデットのシンクロは3体しかいないからそう思うのも無理はないか。そんなことを思っていると黙っていた雪乃が口を開いた。

「ねえキルマ、このデッキで私とデュエルしてくれない？」

久しぶりにデッキを試すということもあってシンクロデッキで雪乃の相手をする事になった。

途中十代たち（何故か宮田ゆまもいた）に会って場所はレッド寮の近くで行うことになった。

それまでは良かった、雪乃がある条件を持ち出すまでは。それは・・・

「ねえキルマ、一つ賭けをしない？」

「賭け？まあ構わないが・・・いったい何を賭けるんだ？」

まあ暇だしいいだろう、というか眠いから早く終わらせよう。そう考えていた俺に雪乃が爆弾発言をした。

「このデュエルに勝ったほうが何でも好きなことを一つ、相手に命令できるの。そう、なんでもね・・・」

・・・は？

「そして敗者はその命令を拒否することはできない、絶対にね・・・」

「おいちよつと待て！お前何命令する気だ！？」

「あら、そんなこと女の口から言わせる気？ふふ、罪人・・・」

いや、なんでそうなる？てか勝っても負けてもリスクがデカイような気が・・・

「キルマアツーー！！貴様、藤原君に何を命令する気だぁーっ！！」
「そうツス！！どんな命令する気なんスかぁっー！！」

ドカバキメキャゴシヤ・・・

つたく、五月蠅いやつらだ。まあ黙ったようだからいいだろう。ん？聞こえてきた何かを殴ったような音は何かって？はて、何のことやら・・・

「と、とにかく受けるの受けないの？」

「・・・まあいい、暇だからな受けてやるよ。その代わり、俺が勝

「つたら覚悟しろよ？」

「き、キルマ!？」

「ダメよ!―あの・・・その・・・ふ、ふしだらな命令は!―」

誰がするかそんなもん。この学園でそんなことしたらすぐにバレルぞ?そして明日香、恥ずかしいなら無理して言うな。

「決まりね。ふふ、楽しみだわ・・・」

・・・負けても勝つても得がある、的な感じの言い方に聞こえるのは気のせい、じゃないよなあ・・・

「・・・まあいい、始めるぞ。」

「「デュエル!」!」

雪乃 LP 4000

キルマ LP 4000

「レディーファーストだ、お先にどうぞ。」

「ふふっ、では遠慮なく。ドロ―!私は『マンジュ・ゴッド』を攻撃表示で召喚するわ。」

マンジュ・ゴッド ATK 1400 / DEF 1000

「そしてマンジュ・ゴッドの効果発動!このカードが召喚・反転召喚に成功した時デッキから儀式モンスター、または儀式魔法を1枚手札に加えることが出来るわ。私は『奈落との契約』を手札に加えるわ。そして今手札に加えた『奈落との契約』を発動!フィールドのマンジュ・ゴッドと手札の甲虫装甲騎士を生贄に捧げ、『ゼラ』を特殊召喚するわ。」

ゼラ ATK2800 / DEF2300

「攻撃力2800!」

「す、すごいんだな!」

「1ターン目でこんな強力なモンスターを召喚するなんて!・・・
すげえよ雪乃!」

「す、すごいです!」

「いいぞ藤原君!その調子でキルマ何ぞ叩き潰してやれ!」

「そうツス!リア充爆発せよツス!」

「あなた達は黙ってなさい!」

・・・あいつら《翔と万丈目》め、もう一度黙らせてやろうか・・・
まあいい、いくら攻撃力が高くとも所詮バニラモンスター、どうと
いうことは無い。

「私はカードを1枚伏せターンエンドよ。」

「俺のターン!ドロー!俺は魔法カード『手札断殺』を発動!手札
を2枚捨て、デッキからカードを2枚ドローする!そして『おろか
な埋葬』を発動!その効果でデッキからモンスターを墓地に送る!
そして『ジャンク・シンクロン』を召喚!」

ジャンク・シンクロン ATK1300 / DEF500

「いきなりのご登場ね。」

「ジャンク・シンクロンが召喚された時、自分の墓地に存在するレ
ベル2以下のモンスターを1体守備表示で特殊召喚する!蘇れ、レ
ベル・ステイラー!」

レベル・ステイラー ATK600 DEF0

「さらに墓地からボルト・ヘッジホッグを特殊召喚！このカードは俺のフィールドにチューナーが存在する時、墓地から特殊召喚することが出来る！蘇れ、ボルト・ヘッジホッグ！」

ボルト・ヘッジホッグ ATK800/DEF800

「か、可愛いです！」

「何とか癒されるモンスターね。」

やはりコイツはどこでも大人気だな。こいつを召喚するところなるからもう慣れたよ。

「それじゃ行くぜ？俺はレベル2のボルト・ヘッジホッグにレベル3のジャンク・シンクロンをチューニング！集いし星が新たな力を呼び起こす。光さす道となれ！シンクロ召喚！いでよ、ジャンク・ウォリアー！」

ジャンク・ウォリアー ATK2300/DEF1300

『ハアアアアアッ！』

「かつ、格好いいです！これがシンクロ召喚なんですネ！」
「すげえ！すげえ格好いい！」

ゆまと十代が騒ぐ。・・・二人ともHEROデッキ使ってるから戦士族モンスターが好きなのは分かるが、もう少し静かに見れないのか？いや、あまりに騒ぐもんだから明日香に怒られてるな。てか明日香のポジションがアニメより苦勞人気質だな。

「ふふつ、確かにシンクロ召喚はすごいけどそれでも攻撃力は2300。ゼラのほうが上よ？」

「いや、そうでもないさ。ジャンク・ウォリアーの効果発動！シンクロ召喚に成功した時、自分フィールド上に存在するレベル2以下のモンスターの攻撃力の分だけ攻撃力がアップする！『パワー・オブ・フェローズ』！」

ジャンク・ウォリアー ATK 2300 2900

「攻撃力2900！」

「ゼラの攻撃力を上回ったッス！」

「行け！ジャンク・ウォリアー！『スクラップ・フィスト』！」

「ああっ！・・・」

雪乃LP 4000 3900

「さらにレベル・ステイラーでダイレクトアタック！」

「ああん！いじわる！」

雪乃LP 3900 3300

「ふふつ、いいわぁ・・・キルマ、貴方の攻撃ゾクゾクしちゃう？」

『え、エロい・・・』

雪乃が攻撃を受けて顔を紅くして体を震わせ、吐息を洩らして悦んでるんだが・・・あいつMっ気もあつたんだな。なんか十代達がつてることが伝わってくるんだが。まああいつらの言いたいことも分からないでは無いしな。

「皆、なんで顔赤くしてんだ？風邪か？」

・・・訂正。十代以外の皆、だな。

side 明日香

「ふふつ、いいわぁ・・・キルマ、貴方の攻撃ゾクゾクしちゃう？」

ゆ、雪乃ったら・・・デュエルでダメージを受けると悦び甘い声をあげてしまう癖、まだ治ってなかったのね。

中等部の中からデュエルの度に色っぽい声を上げるものだから『アカデミアの女王』と言われるようになったのよね・・・雪乃のおかげで皆顔を紅くしてるじゃない。

「皆、なんで顔赤くしてんだ？風邪か？」

・・・訂正、十代以外の皆ね。ふふつ・・・何で私、十代が雪乃に反応しなかったからって機嫌良くなってるのかしら？

side キルマ

（やばいな、雪乃見るともう少し虐めたくなってきた・・・）

今はデュエル中なんだから自重しなきゃならないんだがどうにかならんのかこのDS精神・・・

「あら、どうしたの？」

「あ、あすまん。俺はカードを二枚伏せターンエンド！」

いかんいかん、デュエルに集中しないとな。

「私のターン、ドロー。この勝負、私の勝ちね。『強欲な壺』を発動！デッキからカードを2枚ドローし、二体目の『マンジユ・ゴツド』を召喚。効果で『高等儀式術』を手札に加えるわ。そして発動。私はデッキの『甲虫装甲騎士』二体を生贄に手札から『破滅の王デミス』を特殊召喚！」

破滅の王デミス ATK2400/DEF2000

「デミスの効果発動！ライフを2000払い、フィールドの全てのカードを破壊するわ。『終焉の嘆き』！」

雪乃 LP3300 1300

雪乃の命に应じてデミスがフィールドのカードを破壊する。デミスが領いた気がするんだが気のせいかな？

「ふふつ、まだ終わらないわ。墓地の甲虫装甲騎士2体を除外し、手札から『デビルドージャー』を特殊召喚するわ。」

デビルドージャー ATK2800/DEF2600

デビルドージャー！バナラが昆虫族だからもしやとは思ってたがやっぱりか！というかこいつ、そこらの男より漢らしいデッキだな・・・

「攻撃力2400と2800！」

「雪乃さん、すごいですう！」

「これが決まれば！・・・」

「いけー藤原君！キルマを倒すんだ！」

「今こそリア充爆発する時ッス！」

翔と万丈目。あいつら、後で締める・・・

「焦っちゃダメよ坊やたち。ふふっ、私の勝ちねキルマ。これで・・・」

こいつ何を願う気だ？身の危険を感じるんだが・・・

「デビルドージャーでダイレクトアタック！」

「ぐああっ！」

キルマLP4000 1200

「そしてデビルドージャーの効果でデッキの上から1枚墓地に送ってもらっわ。」

デミスのダイレクトアタックが来る！このままじゃ・・・ん？今落ちたのは！・・・

「デミスでダイレクトアタック！『破滅の一撃』！」

「そうはいくか！墓地のネクロ・ガードナーを除外し、攻撃を無効にする！」

今落ちたのはネクロ・ガードナーだった。俺の前にネクロ・ガードナーが現れ、デミスの攻撃を防ぐ。すまん、ネクロ・ガードナー。

「デビルドージャーの効果が仇になったのね・・・カードを一枚伏せ

ターンエンド。」

「俺のターン！ドロー！俺はカードを二枚伏せ『天よりの宝札』を発動！その効果で互いに手札が6枚になるようドロー！俺は手札を一枚捨て手札から『クイック・シンクロン』を特殊召喚！」

クイック・シンクロン ATK700/DEF1400

「さらに墓地へ捨てたボルト・ヘッジホッグを特殊召喚し、クイック・シンクロンのレベルを1つ下げ墓地からレベル・ステイラーを特殊召喚！そしてチューニング・サポーターを召喚！」

チューニング・サポーター ATK100/DEF100

「俺はレベル2のボルト・ヘッジホッグとレベル1のチューニング・サポーター、レベル・ステイラーに、レベル4となったクイック・シンクロンをチューニング！集いし闘志が怒号の魔神を呼び覚ます。光さす道となれ！シンクロ召喚！粉碎せよ、ジャンク・デストロイヤー！」

ジャンク・デストロイヤー ATK2600/DEF2500

四本の腕を持つ魔神、ジャンク・デストロイヤーが召喚された。

「かけー！」

「ホント格好いいです！」

「二人とも静かにしなさい！」

とうとう本気で怒ったみたいだな明日香は。騒ぐからだよ。おっとデュエルに集中しなくては。

「ジャンク・デストロイヤーの効果発動！このカードがシンクロ召喚に成功した時、このカードのシンクロ素材としたチューナー以外のモンスターの数までフィールド上に存在するカードを選択して破壊する事ができる！『タイダル・エナジー』！」

「なんですって!？」

ジャンク・デストロイヤーの効果で雪乃のフィールドはがら空きになる。伏せていたのはミラフォだったようだ。奈落だったら危なかった。

「これで止めた！ジャンク・デストロイヤーでダイレクトアタック！『デストロイ・ナックル』！」

「きゃああああ!！」

雪乃LP1300 0

「私の負けね、キルマ。」

「実際こっちもやばかったがな。」

なんせデビルドローザーでネクロ・ガードナーが落ちなかったら負けでたからな。もし落ちてなかったとしたら・・・考えたくもねえな・・・ふあああ、眠い・・・

「ふふつ。あなたはいったい何を命令するのかしら？」

「命令?・・・そういや、ンなこと言ってたな・・・」

眠くて忘れてたな。どうやら十代たちも忘れていたらしく、翔と万文目がぎゃあぎゃあ言ってるな。

早く部屋で寝たいんだがな・・・そうだ、命令はあれにしよう！

「雪乃。」

「何かしら？なんでもいいのよ？」

「膝貸せ。」

『・・・は？』

俺の言ったことにみんな目が点になる。さっさと言うこと聞けよ、雪乃。

「・・・どういうことかしら？」

「いいから黙って座れ。」

俺がそういうと雪乃は困惑しながらも言うとおりにした。雪乃が座ると俺は寝転がり、雪乃の膝に頭を乗せる。

「ああーっ!？」

「貴様、なんてうらやましいことを!？」

「だ、大胆なんだな！」

「いろいろな意味ですごいな君は・・・」

「キルマ!?雪乃!？」

「はうう!？」

「なんだ、そんなに眠かったのか？」

雪乃を除いたみんながそれぞれ驚きに満ちた声を上げる中、十代の声を聞けば（おそらく）わかるだろう。

俺が雪乃に下した命令、それは・・・

「まさか膝枕をしろと言われるとは思わなかったわ」

そう、俺が下したのは早い話が膝枕をしるということだ。今日は天気がいいからな、しかもここはいい感じに日が当たって気持ちいい。

「1、2時間ぐらいしたら起こしてくれ・・・」

おやすみ
Z
Z
Z
.
.
.

雪乃
side

「ふふっ、なんとも気持ちよさげに眠っているわね。」

私も負けた甲斐があつたというものね（この言い方だとわざと負けたような言い方ね。）

「さん」

「……ないッス。」

翔と万丈目の坊やが何か言っているけれど聞き取れないわ、いったい何を……

「許さんぞキルマアツー！！よりによつて藤原君の膝で眠るだとふざけるなあつー！！」

「そうッス！許さないッス！！何でキルマ君ばっかなんスかあッー」

!!!

・ ・ ・ しつこい男は嫌われるわよ坊やたち。

「それにしても良かったわ、キルマの命令がこんなことで。もし、その・・・ふ、ふしだならことだったら・・・／＼／＼」

「あら、私はそれを期待していたのよ明日香？」

「ゆ、雪乃!？」

「ゆ、雪乃さん?そ、それはちよつと・・・//」

確かにキルマの寝顔を見れたことは良かったけれど私が勝っていたら・・・

うつん、やめましょう。こんなに気持ちよさそうに眠っているんですもの、こんなことを考えてしまつては悪いわ。

「ふふ、偶にはこついつのも悪くはないわね・・・」

キルマの寝顔を見ながら私はそんなことを考えていたのだつた。

TURN 05 麗しき賭け（後書き）

キ「今回の最強カードは・・・ジャンク・デストロイヤーだ。」

ジャンク・デストロイヤー

「ジャンク・シンクロン」+チューナー以外のモンスター1体以上

このカードがシンクロ召喚に成功した時、このカードのシンクロ素材としたチューナー以外のモンスターの数までフィールド上に存在するカードを選択して破壊する事ができる。

キ「基本的にジャンク・シンクロン、もしくはクイック・シンクロンを使うデッキでは入っているであろうシンクロモンスターだ。素材に使ったチューナー以外のモンスターの数だけフィールド上のカードを破壊できるため、2体以上のモンスターでのシンクロが基本だな。」

ゆきのんの膝枕、これがやりたかった（笑）

書いていくうちになんか妙にエロくなっていったなあ・・・
見て分かるとおりゆきのんのフラグは確立しています。ゆまちゃんでも何かやるので楽しみに！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4677y/>

遊戯王 狂わされし運命

2011年11月30日12時47分発行